

趣旨説明

今日、パーソナルコンピュータと通信技術の飛躍的発達
は、高度情報化社会の進展をますます加速させつつある。高度
情報化社会においては、複雑かつ膨大な情報が瞬時に伝達さ
れ、量的に処理され、コンピュータどうしが緊密なネットワ
ークを形成する。論文検索や論文入手の便宜一つとってみて
も、情報化が人文学研究にも著しいメリットをもたらしたこと
は、われわれが日々実感するところであろう。

特に、人文学がこれまで研究の基本資料としてきた古典籍や
蓄積してきた研究成果の多くは、現在、目覚ましい勢いでデジ
タル・アーカイブ化されつつある。その結果、これまでアクセ
スが限られていた原資料が、デジタル情報のかたちで保存・共
有され、一般に広く開放される。それによって、地理的、時間
的限界を超えて、さまざまな立場の人間が、当該の資料を研究
することが可能となった。

頼住光子

辺境の地であろうと、立派なライブラリーを使用できなくて
も、パーソナルコンピュータ一つで膨大なデジタル情報にア
クセスできる。このようなオープンサイエンスの成立、発展に
よって、研究のすそ野が広がり異分野や異文化の研究者や一般
市民が参入し、新たな研究の視点が開拓される。これを通じて
多様な研究成果が生み出されることが大いに期待できる。

しかし、このような、デジタル化、情報化の目覚ましい進展
の陰には問題点も潜んでいる。まず、その進展の速度があまり
にも急速であったので、それらの情報を扱うための方法論や倫
理がいまだ確立されていないとは言い難い状況である。とりわけ
簡単に複製ができてしまうデジタル情報における著作権の問題
は、重要かつ深刻である。われわれ人文学研究者が重視してき
た「オリジナリティ」という概念そのものの変更すら、それは
要請しかなない。

また、デジタル空間は均質に拡がる無時間的空間であるが、そこでデジタル化される元の資料は、それぞれの風土において歴史的な経緯を背景として成立してきた唯一的なものである。このような「もの」の持つ奥行きをデジタル情報は表現できるのだろうか。われわれは、両者の関係をどう考えればいいのか。

さらに、デジタル情報とは別のメディア、とりわけ書物の重要性をどのように確保していくのかもわれわれにとっては大切な視点であろう。ある実験では、紙の本で読むとデジタル情報として読むより理解度が二倍高まるという結果が出たという。

情報化によってわれわれは、対面以外のさまざまなメディアによる、多様な他者や文化間のコミュニケーションが可能になった。このような、デジタル情報を介してのコミュニケーションを行うにあたってどのようなテラシーを持つべきなのか。

さらに、オープンサイエンスによって広がった裾野を含み込んだかたちで、どのような新たな学問像が描けるのだろうか。

以上のような種々の問いを前にしたとき、比較思想学会がこれまで蓄積してきた人文知は、何をなし得るのかを検討すべく、学会としてパネルを企画するに至った。膨大なデジタル情報を処理し精査し、何らかの価値を生み出すための方法論の構築に対して、特殊から普遍へ、そして普遍から特殊へ、同時に具体から抽象へ、そして抽象から具体へという双方向の往還を方法論的要請として行ってきた比較思想学は、今後大いに貢献が期待されるだろう。異なる文化、文明を背景にした具体的情

報を、デジタル情報として一元化してアーカイブ化する際には、「比較」は有力なツールになり得ると思われる。

当日は、政府の学術情報政策に長年携わっておられる羽入佐和子先生に特別講演として「オープンサイエンスと比較思想」についてお話しいただき、現在の学術分野における情報化に伴う諸問題について特に「思想主体」という切り口からご指示をいただいた。それを受けて、下田正弘先生、浅見洋先生、ゲレオン・コプフ先生をお迎えしてパネル討議を行った。下田先生は、インド学仏教学者として著名であると同時に、世界中の研究者に今なお恩恵を与え続けつつ進化している大蔵経データベース構築事業を牽引し、浅見先生は、西田幾多郎、田辺元、鈴木大拙をはじめとする日本哲学研究や死生学研究の第一線で活躍されるとともに日本で唯一の哲学思想系博物館である石川県西田幾多郎記念哲学館の館長をつとめられている。ゲレオン・コプフ先生は、西田幾多郎や道元の研究者として世界的に有名であるとともに、比較思想学会の国際化を最前線で担ってくださっている。本誌でも報告される三人の提題と討議から、情報化における人文学、そして比較思想研究の特異な位置と意義が浮き彫りになるとともに、今後、この問題については継続的に議論を深化させ、諸論点を噛み合わせていく必要性も痛感させられた。この意味でも有意義なパネルであった。

(よりずみ・みっこ、日本倫理思想史、比較思想、東京大学教授)